

## 病弊その一 国語教育の軽視

漢字指導の実際を述べる前に明瞭にしておきたいことがある。それは、国語教育における病弊であり、取り除くべきものであるが、取り除かないまでも、その病弊について理解がない限り、有効な漢字指導が期待できないからである。

その第一は、「わが国の教育界における国語教育軽視の風潮」である。「いや、そんなことはない。国語科は最も重要な教科として扱われている。その証拠に、国語科学習時間があらゆる教科の中で最も多いではないか」と即座に返答されるであろう。

もしそうだとしたら、そう返答することこそ、国語軽視そのものなのである。

全学習時間の中で、国語学習時間の占める割合を、外国のそれと比較してみられるがよい。高学年ではそれほどの差異は見られないが、低学年(三年生まで)では、わが国が全体の30%にも達していないのに対して、諸外国はいずれも50%程度を国語学習に当てているのである。

一例に、東ドイツの三年生を挙げると、授業時間は二四時間であるが、そのうち国語の学習は一四時間である。これは全体の60%に近い。

ついでに言えば、三年生までの教科は、国語・算数・音楽・図工・体育の五教科だけである。しかも、音楽・図工・体育の三教科はそれぞれ一、二年生では40分、三年生で80分(1時間20分)。だから、音・図・体の三教科合わせても4時間にしかない。それに比べて、国語だけで14時間とは、いかに国語が重視されているかがわかるであろう。

国により多少の違いはあるが、いずれの国でも、「国語学習の時間は、全体のおよそ半分を占めている」ことだけは共通した事実である。独りわが国だけが、きわだって国語学習の時間が少ないのである。

理科や社会科は勿論のことであるが、算数でも、問題の文を読んでそれが理解できなければ学習の進めようがない。文章題が解けない最大の理由は、文章を読解する力が弱いために、式を立てることができないところにある。文章を読んで式を立てるまでの仕事は、国語力に拠るものがほとんどである。社会科、理科の教科書を読んでその

内容を理解する仕事は、まったく国語の学習そのものである。

だから、わが国を除く諸外国は、まず国語力をつけることに努力を傾けている。国語力さえ向上すれば、どの教科の学習能率も上がるので、その学習時間数は少なくとも済む、という考えである。この考え方は正しい。

国語力の弱い若が、どうして理科や社会科の教科書を正しく理解できよう。理科や社会科の学習を始める以前に、高い国語力をつけておくことが絶対に必要になるのである。

私は、指導主事を勤めていたころ、外国の事情を調べてこの事実を知り、それを文部省の某氏に伝えた。「国語の時間を増やすことに異議を唱える者はいないだろう。しかし、そのためには他教科の時間を減らさなければならない。どの教科の担当官も自分の時間を減らすことには絶対に反対するに違いないから、結局は国語の学習時間を増やすことは不可能であろう」というのが某氏の返答であった。

現実とはそういうものであろう。そこで、その対策であるが、小学校では一人の教師が国語も理科も社会科も指導している。だからその指導は教師の裁量でどうにでもなる。故に、『低学年においては、理

科・社会科等の学習は、国語力を養うことを主眼とした指導をすべきである』と考える。

国語の時間数の多い欧米諸国でさえ、理科用語は理科で、社会科用語は社会科で指導するのが原則とされている。その用語の学習こそ、その教科の最も基本的な学習内容だからである。

ところが、わが国では、その用語が漢字であるということで国語科学習に任されている。だから、そうでなくても時間数が少なくて困っているというのに、いよいよ時間が足りなくなってくるのである。

これを解決する方法は、現在のところ、『すべての教科を通じて漢字力を養うことに努力する』こと以外に方法はないであろう。その指導法の実際については後述する。